【特集】新しい日常、そして今後：コロナ禍を経験して
—現代行動科学会第 37 回大会テーマセッションから—

テーマセッション
「新しい日常、そして今後：コロナ禍を経験して」の趣旨と成果

企画・司会　○山本　麻友美（岩手大学　保健管理センター）
鈴木　護　（岩手大学）

１　テーマセッションの趣旨と話題提供者、コメンテーターの紹介

新型コロナウィルスの蔓延は、これまでの生活を大きく変えることになった。行動が制限され、IT 化が加速し、日々の生活は大きく変化した。緊急事態宣言を受け、首都圏エリアでの緊迫した雰囲気と、最後まで感染者ゼロ県であった岩手とでは、人々の行動や心理に大きな差があったと思われる。未だ続くこの禍を、我々はどのように受け止め、乗り越えようとしているのか。

この企画は、各地で様々な立場にある 4 名の学会員に、経験したことや率直な思いを共有していただき、コメンテーター及び参加者を含め「対話すること」自体を目的としたオープンダイヤローグ的セッションである。

話題提供者の草薙伶央さんは報道関係者の立場から、個人とメディアとの関係、コミュニケーションの必要性についてお話しいただいた。高橋恵子さんは病院勤務の心理職として、コロナ禍の社会的な影響とメンタルヘルスの支援についてお話しいただいた。髙橋智幸さんは仙台市役所での精神保健福祉に関わる職務において、業務への影響や取り組みについてご紹介くださった。斎藤貢さんは企業の IT 部門を管理されており、テレワークの環境を整えるための尽力についてお話しいただいた。最後に、岩手大学の奥野雅子先生より臨床心理的視座からのコメントをいただき、誰も経験したことのないこの事態の中においても、「今ここ」に焦点を当て続ける意味について考える機会となった。

２　セッションの概要

4 名の話題提供者に共通していたのは、たくさんの苦労があったと同時に、半ば強制的に起こった変化になんとか適応していく中で得られた新しい視点やポジティブな面であった。
2020 年 12 月時点で、ワクチンの開発等は進んではいるもののまだこの禍の終わりは見えない。現在進行形で続くこの事態の中で、新しい生活様式がどうあるべきかといった答えを出すことや、この経験をどう生かすべきかといった解釈を決定づけることは難しい。日々のニュースに一喜一憂しながらも、答えの出ない事態に耐える力がやはり必要とされているのかもしれない。本テーマセッションでは、不確実性に耐えながら思いを共有することで、参加者が各々の世界観を広げ、深め、今後それぞれの立場において新しい生活様式と向き合うための新しい視点を得ることができたのではないだろうか。

今年度は初のオンライン開催ということで、準備段階より関係の皆さまには多々お手数をおかけしました。話題提供者、コメンテーター及び大会参加者の皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。